

平成 21 年度第 3 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

平成 21 年 12 月 15 日 市民文化課

SWOT分析法と呼ばれる手法を用いて、札幌の文化芸術面における強みと弱み及び札幌を取り巻く環境面における機会と脅威（ ）について分析を行った。委員それぞれから意見発表をし、今後の会議において提言等を行う上でのベースづくりに活用することとした。

強み：目標達成に貢献する組織（個人）の特質。
弱み：目標達成の障害となる組織（個人）の特質。
機会：目標達成に貢献する外部の特質。
脅威：目標達成の障害となる外部の特質。

主な意見は以下のとおり。

【強み（strength）】

- 190 万人都市という規模がちょうど良い。（中津、中島）
- 住んでみたいところのランキングで毎年上位にきており、人を引き付ける魅力がある。（中津）
- 演劇の場合、東京、大阪を除くと層が厚い方である。特に 30 代の中堅層が厚い。（斎藤）
- 物件が安いことも有利ではないか。より広い稽古場を借りることができる。（新堀）
- 映画のロケ地として力を入れており、オファーが多い。札幌市の特性として、自然もあり、都市もあり、色々なものがあるというのはよく言われている。（早川）
- クラシックと映像コンテンツ（特定のメディアアートなど）が強いイメージがある。（斎藤、大平、早川）
- 文化活動は多彩であり、活性化していると思う。（大平）
- 邦楽の場合、レベルが非常に高いと言える。（中島）

- 一般的に、伝統音楽は封建的なところがあり、流派や家元によって混じり合うことができない。札幌は、東京からの距離があるから、その点が自由である。流派の違うところが合同で2時間の組曲をやったが、東京からみると、新物がジョイントしやすい環境があることが強みである。(中島)

【弱み(weakness)】

- 独自性が弱い。東京と近いから。(中津)
- 文化の基盤や培ってきたもの伝統、理念の欠如。(早川)
- 新しいもの好きの反面、根気がない。(早川)
- 立地が遠いので興行費が掛かり、やりづらい。(斎藤)
- 芝居の若い世代の勉強する姿勢がない。他人の芝居を見て勉強するということをしない。自分たちで力をつけて、成功していくという道筋が見えていないせいかもしれない。(斎藤)
- 仕事をやりながら演劇を続けることの難しさ。思いきり打ち込める環境をつくってあげたいが、大きな壁がある。(斎藤)
- 映像の世界でいうと、プロデューサー的な人間がいない。どれぐらいの規模で宣伝すれば採算が取れるかなど、才能があっても、プロデューサー能力がないと芽が出ない。アートマネジメントの話にもつながる。東京の場合は、産業の仕組みとして、プロダクション事務所で、ある程度育ってから独立するという道がある。(早川)
- 資金の問題がある。北海道は支店経済であり、支店長クラスではスポンサーになって後援する権利を持っていない。地場の会社で、スポンサーになれる大手は限られている。(中島)
- 文化活動がバラバラである。(大平)

【機会(opportunity)】

- 北海道の気風として、新しいものが好きである。(早川)
- 札幌市が文化行政に力を入れて行こうとしている。(早川)

- 短期的な視点でいくと 2011 年に地下歩行空間ができるなどの後押しがある。(早川)
- アートマネジメントの専門家集団であるアートセンターの設立が予定されている。(大平)

【脅威(threat)】

- 物事を作っていく上で、基盤やひな型がないので、ゼロから始めなければならず、時間が掛かり、効率が悪い。(早川)
- 景気が悪いこと。(早川)
- 鑑賞の訓練までできるようなアーティストを育てたいと考えているが、成功のモデルケースが身近にない。ここ最近では、札幌にいなながら演劇を続けたいという人たちが増えてきているのに、彼ら自身が手探りでしかできていない。「とにかく賞を取れ。」としかいえない。(斎藤)
- 行政的な施策が見えないため、自分たちのような小さな団体の中で、何ができるのか、どうしていくべきなのかというのがなかなか見えない。(斎藤)
- アートマネジメントのモデルがない。(斎藤)
- アーティストと付随して生活する演劇の専門スタッフの環境がまだ整っていない(全く遠いというわけではないが...)(阿部)
- 演劇をやっている人たちへの平等な支援。(トップを育てるべきであり、平等な支援がはたして良いのかという考え方がある。)(阿部)
- 一番恐ろしいのは、食べて行くことができず人材が流出してしまうこと。(大平)
- さっぱりアートステージが知られていない。情報を総括して広報する機能が弱いのではないか。(中津)
- そもそも市民は文化芸術を欲しているのか、という疑問がある。(斎藤)
- スポーツ選手は企業が雇っているが、打率など数字で明確に雇うべきかの指標があって、わかりやすい。クラシックにはある程度世界水準があり、技術の優越がわかるが、演劇には指標がないし、伝統芸能のようにどこまでできたらいいいといった判断基準もない。(中津)

- 映画を1本作るにしても、配給のシステムなど参考とするものが身近にない。ケーススタディとなるようなものがない。(その反面、自分の好き勝手にできるという強みもあるが。)(早川)

【広報】

- 行政の広報力はすごいと思う。広報さっぽろに載るだけで反響力は大きい。(斎藤)
- 観光文化情報ステーションも大きな武器になる。(大平)
- ネットよりも、たくさんの場所で、枚数を多くさばくことの方が大切。(斎藤)
- イベントに参加していない人の耳に情報を届けたい。観光文化情報ステーションを訪れる人は、ある程度知識がある人。ここは本当に便利なので、ホームページをもっとわかりやすくすべき。(阿部)
- 東京の美術館では、広報についての分析を入念にやっており、どの広報の仕方が効果的かを判断して広報活動を行っている。外部から広報の専門家を雇ったりもしている。(佐々木)
- 市民芸術祭は、広報さっぽろに掲載されるため、集客効果が多大である。普段は邦楽に興味のない人にまで来てもらえる。(中島)

【芸術家のあり方・支援】

- 邦楽の場合は、アーティスト活動のほかに自宅で教室を開いて教えることによって食べていける。(中島)
- 教育の場で、先生として生徒に教えて収入を得ることと、アーティスト活動のみで食べて行くことは別である。ほとんどのアーティストは、教育の場に足を踏み入れて、生計をたてている。そのことが、札幌がある一定のところまでは行っても、それ以上にいけない理由だと思う。本来は、舞台だけ、オーケストラだけの活動で生きていける人が、もっとたくさんいなければいけない。(蔵)
- スポーツ界に共通する部分があると思う。スポーツ選手はそれだけで成り立っている。芸術分野とスポーツ界も同じような仕組みだと思うが、芸術面の

方が全く成り立っていないのはなぜか。(阿部)

- スポーツに対して、芸術は馴染みにくいからではないか。(斎藤)
- アーティストにとってアーティスト活動だけで食べて行くことに対し、教育活動をしながら活動をして食べて行くことは不幸だといえるか。(佐々木)
- 不幸だとは思わない。しかし、公的な支援などによりアーティスト活動のみに専念できた方が、世界的なアーティストが育つ可能性がある。(蔵)
- アーティストにとっては、24時間その活動ができるのが理想形。(早川)
- 札幌交響楽団が受けているような支援を他の芸術家たちも受けることができるような仕組みが必要である。(蔵)
- 支援の仕方にも税金、企業メセナ、市民からの寄付などいろいろある。税金の投入は簡単にはいかない。(事務局)
- 野球選手は企業に所属しながらも、野球しかやらない。そういった形を芸術分野において、あてはめることができないか。ノンプロのような形で企業の協力を得ながら芸術活動を行えるような仕組みができないか、と思う。(中島)